

# 殺人裁判

チャールズ・ディケンズ



知性と教養が抜きんでた者たちの間でさえ、自分の心理的な体験を人に話すとき、特に世にも不思議なことを話す時は、物おじしてしまう場合が多いのではないだろうか。私はいつもそのように思ってきた。ほとんどすべての人たちは、そんなことを話してみても、それに匹敵するものや呼応するものが聞き手の内面生活になく、結局は疑われるのではないか、笑われるのではないかと思ってしまうようである。大海蛇<sup>(1)</sup>に似た何か尋常ならざる生き物を実際に見たことのある正直な旅人がいたと仮定してみよう。その場合は、人に話して聞かせることに二の足を踏んだりしないであろう。とはいえ、この旅人が何か奇異な予感、衝動、突飛な考え、幻覚（とやら言うもの）、夢、その他、頭に焼きつくような珍しい印象を受けたとすれば、それはまったく別問題である。おそらく、その告白には相当なためらいが伴うだろう。こうしたことを話したからないのは、その話題が隠微な世界と大いに関係しているからではあるまいか。実在する森羅万象に関する経験の場合と違って、このような実体のないものについての体験を語ることは、私たちには通例あまりないと言つてよい。それゆえ、主観的な体験談が世間一般で備蓄されることは非常にまれであり、備蓄自体が今もって悲惨なほど不完全だという点において、そうした体験談は本当に珍しいものとなっている。

これから語ることににおいて、私は何か仮説を立てたり、実証したり、それを否定したりするつもりは毛頭ない。ベルリンの書籍商<sup>(2)</sup>に関する話を知っているし、デイヴィッド・

ブルースター卿<sup>(3)</sup>が語った今は亡き王立グリニッジ天文台長<sup>(4)</sup>の妻についての事件を調べたこともある。また、私の仲間内で起こった幽霊の幻想に関する実に驚くべき事件については、微に入り細にわたって探求したことがある。この最後の事件については、体験者（女性）と私との血のつながりは、たとえどんなに薄くても、全然ないと述べておく必要がある。その点を誤って考慮されると、私自身の体験の一部まで——とはいえ、ほんの一部だが——同じような説明がされてしまい、この体験談はまったく根も葉もない話となってしまうだろう。この体験は私が先祖から受け継いで発現した奇癖のせいではない。以前それと似たような経験をしたことも、それ以後に同じような経験をしたことも、まったくないのである。

あるとき、耳目を驚かすような殺人事件がイングラントで起こった。どのくらい昔のことだったか、どのくらい最近のことだったか、そんなことは大した問題ではない。昨今は残虐さで名をとどろかせるような、そうした殺人犯が次々と現われているのではないか。<sup>(5)</sup>そうした話はもう聞きたくない。特に、この残虐な男についての記憶は、できれば処刑された男の死体を埋葬したように、ニューゲート監獄<sup>(6)</sup>に葬り去ってしまいたいくらいだ。この犯罪者の性格を解明する直接の手がかりを与えることについては、私は意図的に控えておきたいと思う。

最初に殺人が発覚したとき、あとで公判に付されることになった男には、まだどんな容

疑もかけられていなかった。いや、私が述べる事実については、念を入れて正確を期したので、その男が容疑者であるなどは、それとなく世間でささやかれたことさえなかつたと言っておく必要がある。そのころ、この男のことが新聞で言及されることはまったくなかつたので、その人相や服装が当時の新聞に書かれたことなど、あろうはずもない。

朝食時に新聞<sup>(7)</sup>を開いて、その事件を初めて報じた記事を読んだとき、私は深い興味を覚え、三度と言わないまでも、二度も読んでしまった。発見された場所は寝室だった。私は、新聞を下に置いた瞬間に、ぞくつとする感じ——心地よい感じ——すーつとする感じ——何と言えばよいのか分からないが、うまく言葉では表現できないような感じ——を覚えた。その際に、（ありえないことだが）川の流れに描かれた絵のように、事件のあった寝室が私のいた部屋をさーつと通り過ぎるような、そんな気がした。それが通り過ぎたのはほんの一瞬のことだったが、私には鮮やかに見て取れたのだ。あまりに鮮やかだったので、ベッドから死体が消えていることまで観察することができた。それはまぶたに鮮明に焼きつくほどであった。

この奇妙な感覚に襲われたのは、怪奇的な場所ではなく、セント・ジエイムズ通り<sup>(8)</sup>の角のそばにあるピカデリー<sup>(9)</sup>のアパートであったが、そんな体験は私にとって本当に初めてのことだった。そのとき、私は安楽椅子に座っていたのだが、椅子が動いてしまうほどの奇妙な震えが、その感覚のあとに生じた。もっとも、椅子はキャスター付きで動きやす

かったと言っておかねばならない。私は、下のピカデリーの通りで動いている物を見て視力を回復させようと、窓の一つに近よった（部屋は三階にあって窓が二つあった）。秋の明るい朝のことで、街路は活気に満ちて賑やかだったが、強い風が吹いていた。窓の外を見ると、セント・ジエームズ公園<sup>(10)</sup>から運ばれてきた多量の落ち葉が、突風に乗ってくるくと舞い上がり、やがて渦巻状の柱になった。その柱が倒れて落ち葉が散乱すると、二人の男が街路の反対側を通過して、西から東へ歩いて行くのが見えた。縦列をなして歩いていたが、前を行く男はしばしば肩越しに振りかえっていた。三十歩ほど離れて彼を追いかけていた後方の男は、威嚇するように右手を振りあげていた。

まず第一に、このような公共の大通りで、あのように奇妙にも威嚇するような身振りを続けていることに、私は注意を奪われた。それから、さらに驚いたことに、誰もそのことに気を留めていないという事実にも注意を奪われた。二人とも他の通行人の間を縫うように歩いている。しかも、歩道の上を歩くという行為と矛盾するかのようには、すすいと。私が見たかぎりでは、二人に道を譲ったり、接触したり、あとを追って見たりする通行人は一人もいなかった。二人は私の部屋の窓の下を通る際に顔を上げて、こちらの方をじっと見ていた。二人の顔はつきりと見えたので、私はどこで会っても彼らだと即座に分かると思った。だからと言って、二人のどちらかの顔に何か非常に目立ったものがあって、それが私の意識に残ったというわけではない。ただ、前を行く男の方は異常なほど顔をしか

めていて、追いかけている男の顔色は汚れた蠟人形のような色であった。

私は独身である。所帯といつても召使いとその妻しかいない。ある支店銀行で仕事をしているが、その部長としての務めは、世間一般で思われているように軽いものではなかった。そのため、気分転換が必要だったにもかかわらず、その年の秋はロンドンに引き留められていたのである。私は病気ではなかったが、さりとて健康でもなかった。疲れを感じ、単調な生活で意気消沈し、「ちよつと消化不良」になつていた。読者の皆さんはそのことを、常識の範囲内で、好きに考えてくださつて結構である。当時の私の健康状態については、かかりつけの有名な医者が、それ以上に自信のある説明はできないとはつきり言つたので、要求に応じて彼が書いてくれた診断書から、私としてはそのまま引用するしかない。

殺人事件の詳細が徐々に解明されるにつれ、一般大衆は次第に心を強く奪われるようになった。そのように皆が興奮する中で、私の方はできるだけ自分の目と耳から遠ざけることで、事件については考えないようにしていた。しかし、故意の殺害に関する評決<sup>(11)</sup>が容疑者にとって不利に下されたこと、そしてその男が裁判のためにニューゲート監獄に収容されたことは分かった。また、偏見が世間に広がっているだけでなく、被告側の準備に時間が足りないという理由で、彼の裁判が中央刑事裁判所<sup>(12)</sup>の開廷期を一つ飛ばして延期されたことも分かつていた。さらに、延期された彼の裁判の次の開廷期がいつ、あるいは

いつ頃、始まるのかさえ私は知っていたのかもしれない。でも、実際には分かっていたいなかったのだと思う。

私の居間と寝室と化粧室はすべて同じ階にあった。最後の化粧室へは寝室を通らなければ行けなかった。正確に言えば、化粧室には扉が一つあって、かつては階段とつながっていたのだが、今では浴室の配管の一部が——その時はすでに何年かたっていたのだが——扉を横切る形で固定されていた。それと同じころ、同じ部屋の改造の一部として、化粧室の扉は釘づけされ、その上には布が張られていた。

ある日の夜更け、私は寝室に立って、就寝前の召使いに何かの指示を与えていた。私の顔は化粧室に通じている唯一の扉に向いていたが、その扉は閉まっていた。そして、その扉の方に召使いは背中を向けていた。ところが、彼と話しているうちに、その扉が開き、ある男が顔をのぞかせ、とても真剣に何かわけありな様子で、私を手招きしているのが見えたのである。それはピカデリーを歩いていた後方の男、あの汚れた蠟人形のような顔色をした男であった。

その人影は手招きをしたあと、引き下がって扉を閉めた。私は寝室を横切ると、すぐに化粧室の扉を開け、中をのぞいてみた。すでに明かりをともした蠟燭を手に持っていた。そのとき、人影が化粧室にいるのではないかという、そうした霊的な予感は無かった。案の定、そこに男の姿は見えなかった。

召使いがきよんとしているのに気づいたので、彼の方を向き、「デリック、信じられるか？ 冷静沈着な時に見えるなんて、あんな——」と言った。そこで、私が彼の胸に手を置くと、彼は突然はっとして、激しく震えながら、「ええ、そうですとも！ 死人が手招きしておりました！」と答えた。

ところで、このジョン・デリックなる男——二十年以上も私の信頼と愛情を得てきた召使い——が、そうした人影のようなものを見た気になったのは、私が手で彼に触ったからではないだろうか。私が触ると、実際とても驚くべき変化が彼に生じた。彼は人影を見たような感覚を、その瞬間に何かオカルト的な媒体によって、私から得たとしか思えない。

私の命令を受け、ジョン・デリックがブランデーを少し持ってきたので、ひとくち彼に与えた。もちろん私も喜んで少し飲んだ。その夜の不思議な事件の前、起こったことについて、私はひとことも彼に話していなかった。そのことを思い起こしていると、以前あの顔を見たことがあるとすれば、それは私がピカデリーで見た、あの一回きりだと次第に確信するに至った。扉の所で手招きしていた人影の表情と、窓辺に立っている私の方を見上げた男の表情を比べ、私は次のような結論に達した。つまり、あの人物は一回目に私の記憶に自分を留めるようにしておき、二回目に私が即座に思い出すように念を押したのである。

その夜、あの人物が再び現われることはないだろうという、そうした説明しがたい確信

を抱いていたにもかかわらず、私はあまり気分がよくなかった。夜が明けると、私は泥のように眠った。ジョン・デリックが片手に書類を持って枕もとに来たとき、やっと私は目をさました。

この書類が原因で、それを配達した男と私の召使いが、どうやら戸口で口論していたようである。それは私に宛てた召喚状で、オールド・ベイリー<sup>(13)</sup>にある中央刑事裁判所の次の開廷期で陪審員を務めよというものであった。ジョン・デリックがよく知っているように、これまで私は一度もそういった陪審に召喚されたことがない。召使いの意見によれば——そう思うことがもつともであったか否か、今この瞬間でも私には分からないが——そうした部類の陪審員は、私の場合より身分が低い者から選ばれるのが通例だということであつた。最初に彼が召喚状の受け取りを拒否したのはそのためである。召喚状を届けた男は、この問題をとて冷めた目で受け止めていた。その男が言うには、私が召喚に応じようが応じまいが、自分には関係のないことで、とにかく召喚状は渡したので、もう自分に責任はないから、あとはそちらの責任で処理してくれ、ということであつた。

一日か二日の間、この呼び出しに応じるか、それとも無視すべきか、私は決めかねていた。そのとき、ある方向へ心が傾いたり、影響を受けたり、引きつけられたりするようない思議な力は、私の中ではほんの少しも感じられなかった。その点については、今ここで述べている他のすべての点と同じように、完全に確信している。結局、単調な生活に変化

を与えるために、私は行くことに決めた。

指定された朝は十一月のある薄ら寒い時であった。ピカデリーには褐色の濃い霧が出ていて、その霧はテンプル・バー<sup>(14)</sup>の東あたりで真つ黒となり、この上なく重苦しい感じを与えていた。裁判所の廊下や階段はガス灯でギラギラと照らされており、私は法廷自体も同じガス灯による照明がなされていることに気づいた。執行官に案内されて旧法廷の方へ入ったわけだが、その混雑した状態を見て初めて、その日が例の容疑者の裁かれる日であることを知ったような気がする。また、そのように手を借りて、どうにかこうにか旧法廷に入って初めて、開廷中だった二つの法廷のどちらに自分が連れて行かれたのか、分かったような気がする。しかしながら、これを自信に満ちた主張のように受け取ってもらっては困る。なぜならば、私はどちらの点も頭の中で完全に確信しているわけではないのだから。

私は任命された陪審員たち専用の場所に座り、どんよりした霧と人間の息からなる暗がりを通して、できるだけ注意して法廷を見渡した。大きな窓の外では汚いカーテンのように黒い蒸気がたちこめているのが見え、外の街路にまかれた藁<sup>わら</sup>やタン皮の穀<sup>(15)</sup>の上を通る馬車の車輪の鈍い音が聞こえた。また、そこに集まった人々のざわめき、そのざわめきの中を貫く鋭い口笛の音や、とりわけ大きな歌声や叫び声などが時おり聞こえた。そのあとすぐ、裁判官が二名ほど入廷して席に着いた。すると、ガヤガヤしていた法廷が水を打っ

たように静かになった。「容疑者を被告席へ」という命令が出され、殺人犯がそこに姿を現わした。その瞬間である。私がピカデリーで見た二人のうち前方を歩いていた、あの男だと分かったのは。

そのとき私の名前が呼ばれたとしても、聞こえるように返事することはできなかったような気がする。だが、私の名前は七番目か八番目くらいに呼ばれたので、その頃には「はい！」と返事ができるようになっていた。ここで注意されたし！ 私が陪審席に進み出ると、注意を払いながらも無関心を装って傍観していた容疑者は、激しい動揺を見せて自分の弁護士を手招きした。明らかに容疑者は私を陪審員とすることに異議を申し立てたいようであった。そのせいで、しばらく裁判が中断した。その間、弁護士は被告席に片手を置き、依頼人である容疑者とささやいたり、首を横に振ったりしていた。これは後日その弁護士から聞いた話であるが、容疑者がおびえたように彼に語った最初の言葉は、「どんなことがあっても、あの男だけは拒否してくれ！」というものであった。しかし、その理由を容疑者がどうしても明かさず、点呼されて私が姿を現わすまでは、私の名前さえ知らなかったことを認めたので、弁護士は私を陪審員として拒否することをしなかったそうである。

あの殺人犯についての気味の悪い記憶を呼び起こしたくないという、私がすでに説明した理由だけでなく、あの長い裁判について詳しい説明をすることが、この物語に絶対必要

であるとも思えないので、私たち陪審員が昼も夜も缶詰状態にされた十日間の中で、私自身の奇妙な個人的体験と直接関係がある出来事だけに密着して、話をしてみたいと思う。私が読者諸氏の関心呼び起こしたいのはその点であって、殺人犯の方ではない。注意を喚起したいのはそのことであって、ニューゲート・カレンダー<sup>(16)</sup>に収められた記録の一つではないのだ。

私は陪審長に選ばれた。裁判の二日目の朝、証人調べ（教会の鐘が聞こえていたので二時間かかったと分かった）が終わったあと、たまたま仲間の陪審員たちの方に目をやったとき、彼らの数をチェックするのに、どういうわけか困難をおぼえた。何度か数えてみたが、いつも同じように難しさを感じた。要するに、一人だけ多すぎると思ったのである。

私は隣の席にいた陪審員の注意をうながし、「すみませんが、ちよつと私たちを数えてくれませんか？」とささやいた。この要求に彼は驚いた様子であったが、顔をそらして数えてくれた。突然、彼は「おや」と言った。「私たちは十三人——、いやいや、そんなはずはない。いや、やはり十二人だ」

その日の私の照合では、詳しく数えてみると、いつも十二人だったが、ざーっと数える時、いつも一人だけ多かった。その説明となるような人影——幽霊——は見えなかったものの、そのとき私は例の人物が必ず現われるような虫の知らせを受けたような気がする。

陪審員はロンドン亭<sup>(17)</sup>に収容された。全員が同じ大きな部屋で別々のテーブルをベッド

にして寝た。私たちを安全に保護することを誓約させられた役人が、全員の管理および監視を四六時中していた。その役人の実名を伏せておく必要はあるまい。彼は頭がよくて、非常に礼儀正しく、世話好きだったし、(私はそれを聞いて嬉しかったのだが) シティー<sup>(18)</sup>ではとても尊敬されていた。態度は感じがよく、目は魅力的で、黒い頬髭<sup>ほおひげ</sup>は人もうらやむほどであり、朗々とした声はすばらしかった。彼はハーカーという名前であつた。

夜になつて私たちが十二のベッドに入ると、ハーカー氏は自分のベッドを部屋の扉の前に移動させた。二日目の晩、私はまだ横になりたくなかつたし、ハーカー氏もまだベッドに座つていた。それで、私は彼のそばに行つて腰かけ、かき煙草を一つまみ差し出した。ところが何ということか、煙草入れから一つまみ取る際に、彼の手が私の手にふれて、あの奇妙な震えが彼の全身に走つたのである。「こいつは誰だ!」と彼は叫んだ。

ハーカー氏の視線を追つて部屋の端を見ると、案の定、あの人物——ピカデリーで見た二人のうち後方を歩いてきた男——の姿が見えた。私は立ち上がつて、何歩か前に進み、それから立ち止まつて、ハーカー氏の方を振りかへつた。彼はまったく何気ない様子で笑ひ、愉快そうに言つた。「一瞬、ベッドもないのに、十三番目の陪審員がいるような気がした……のですが、どうも月の光のせいだつたようです」

ハーカー氏には内情を明かさず、ちよつと彼を誘つて部屋の端まで一緒に散歩をしながら、人影が何をしようとしているかを注意して見た。それは、私の十一人の陪審員仲間そ

それぞれの枕もとへ順番に行き、そのベッド脇にしばらく立っていた。いつもベッドの右手にまわり、いつも次のベッドの足もとを通って、移動して行つた。頭の動きから判断すると、それぞれ横になった陪審員を悲しげな面持ちで見おろしているだけのように見えた。ハーカー氏のベッドに最も近かつた私のベッドや、私自身には見向きもしない。私が見ていると、この人影は月の光が差し込んでいる所から、つまり部屋の高い窓を通って、まるで空中の階段を昇っているかのように、消えて行つた。

翌日の朝食時、その場にいた者は全員、私自身とハーカー氏を除いて、昨晚あの殺された男の夢を見たということが分かつた。

そのとき、ピカデリーを歩いていた後方の男が（言ってみれば）殺された被害者であることを、まるで彼の直接証言によつて理解させられたかのように、私は確信した。ところが、実際に彼自身による直接証言が、私のまったく予期しない方法で、なされることになつたのである。

それは裁判の五日目のことだつた。検察側の陳述が終わりに近づいた頃である。殺人事件が発覚した際には、被害者のベッドから消え失せていたミニチュアの肖像画が、そのとき証拠品として出された。それは、加害者が穴を掘って隠そうとしているのを目撃された場所で、のちに見つかったものである。尋問中の証人によつて誰の持ち物かが確認されたあと、それは裁判官に手渡され、そこから今度は検分のために陪審員たちに手渡された。

黒い制服を着た執行官がそれを持って、私の方に進んできた丁度そのとき、ピカデリーを歩いていた後方の男の幽霊が、猛烈な勢いで傍聴人の間から飛び出し、そのミニチュアの肖像画を執行官の手から奪い取って、両手で私に差し出した。そして、私がロケットに収められた肖像画を見る前に、幽霊は虚ろな低い声で次のように言った——その頃は、若くも、若かつたし、顔から血の気も抜かれていなかっただけです。幽霊はまた、私が隣の陪審員に肖像画を渡そうとするのを妨害し、その陪審員がさらに隣に渡そうとすると、その邪魔をした。このようにして、肖像画は私たち陪審員に次々と渡され、最後はまた私の手もとに戻ってきた。しかしながら、幽霊の正体に気づいた陪審員は私以外に一人もいなかった。

食事の間、そして一緒に収容されてハーカー氏の監視を受けている間はほとんど、当然ながら初日から私たちは、その日の出来事について活発に議論していた。五日目に検察当局の陳述が終わり、この事件の検察側の言い分がすべて明らかになると、私たちの議論はさらに活気を呈し、真剣なものとなった。十二人の陪審員の中に教区民代表——なぜ監禁されないのか不思議でならない大馬鹿者——がいた。この男は明々白々な証拠に対して途方もない異議を唱えていたが、それをまた同じ教区の二人のだからしない太鼓もちが支持していた。この三人は、ある地区から陪審員として選出されていたのだが、その担当地区に熱病を蔓延させ、五百人を殺してしまったのだから、むしろ自分たち自身の裁判にかけられてしかるべきだった。<sup>(19)</sup>この有害無益な木偶でくの坊たちが大騒ぎしているとき、私はあの

殺された男の姿を再び見るようになった。それは私たちの何人かが寝る準備をしていた真夜中近くである。彼はいかめしい顔をして、木偶の坊たちの背後に立ち、私を手招きしていた。私が馬鹿者たちの方へ行つて、その会話に割つて入ると、すぐに彼は退いてしまった。これは、私たちが監禁されていた長い部屋に限定して、再び起こった一連の幽霊出現の始まりであつた。陪審員仲間が顔をよせて密談していると、殺害された男の顔がその間に必ず見えた。また、みんなが述べ合った意見が自分にとつて不利なものだと分かると、その男は必ず抑えきれないように、しかつめらしい態度で私を手招きした。

裁判の五日目にミニチュアの肖像画が提出されるまで、私はこの法廷の幽霊を一度も見ることがなかつた。そのことは心に留めておいてもらいたい。ところで、被告側の陳述が始まつてから、三つの変化が起こつた。最初に、その二つを一緒に述べておこう。例の幽霊は今ではずっと法廷にいるようになった。この場所で私に注意を向けることは決してなく、その時しゃべっている人間を始終じつと見つめていた。まずは一つ目の例だが、殺された被害者は喉を真つ二つに切り裂かれていた。被告側の冒頭陳述で、故人は自分で喉を切り裂いたのかもしれないという可能性が示唆された。まさにその瞬間、喉が恐ろしい状態に裂けた幽霊は（それまで喉を隠していたのだが）、話している男のそばに立つて、時には右手で時には左手で、喉を切り裂く仕草をしながら、こういう傷はどちらの手にせよ自分で加えることなんかできないと、話している本人に対して懸命に示そうとしていた。

次に二つ目の例。性格証人<sup>(20)</sup>として立った女が、被告ほど気だてのよい人はいないと宣誓証言した、その瞬間に幽霊は彼女の前の床に立って、その顔をじっと見つめながら、腕を広げて指を伸ばし、被告の邪悪な顔を指し示していた。

さて、三番目に起こった変化を今から書き加えなければならぬが、それは三つの中で最も顕著な変化として私に強い印象を与えた。それについて私は仮説を立てたりせず、正確に述べるだけにしておきたい。幽霊自体が注意を向けた人たちによって気づかれることはなかったが、幽霊がそうした人たちに近づくと、結果として彼らの側に何か動揺や不安がいつも見て取れた。まるで幽霊は、私には従う義務がない法のために、私以外の人間たちに身を明かすことができないかのようなであった。しかし、その一方で、目に見えないように、無言のうちに、そつと彼らに暗い影を落とすことができるように思えた。これは紛れもない事実だが、仮説として自殺をほめかした被告側の主席弁護人のそばに幽霊が立ち、切り裂かれた自分の喉をノコギリで引くような、そうした恐ろしい仕事をすると、その学識ある紳士は演説の途中で口ごもってしまった。そして、彼は巧妙に続けていた話の穂を継ぐことが数秒間でできなくなると、ハンカチで冷や汗をぬぐって、真つ青な顔になってしまった。また、幽霊が性格証人の女と対面すると、彼女は幽霊が指で示した方向を目で追い、本当に気が進まない困った様子で、容疑者の顔を見ないわけにはいかなかった。

さらに二つの例を挙げれば十分だろう。裁判の八日目のことだ。毎日、午後の早い時刻に軽食つきの休憩がしばらくあったが、その日は中断のあと裁判官たちが戻ってくる少し前に、私は他の陪審員たちと一緒に法廷に戻っていた。陪審席に立つて周囲を見渡すと、幽霊がいなくなっているのに気づいたが、たまたま二階の傍聴人席に目を向けたとき、幽霊が前かがみになって非常に上品な婦人におおいかぶさるように立っているのが見えた。それはまるで裁判官が席に着いたかどうかを確かめたいかのようにだった。その直後だ——婦人が金切り声をあげて気を失い、法廷の外へ運び出されたのは。裁判を指揮していた高德の、聡明な、我慢づよい裁判官もまた同断であった。証言の聴取が終わってから、裁判官が申し立てを概説するために自分の気持ちと書類を整理していたとき、あの殺害された男が裁判官専用の扉から入ってきた。そして、裁判官閣下の机の方に近づき、閣下がめくっていた覚え書きのページを肩越しにじっと見つめていた。すると、閣下の顔に変化が現われた。手の動きが止まり、私がよく記憶している例の奇妙な震えが生じたのである。閣下は口ごもりながら「しばらく失礼します、みなさん。むっとする空気のせいで、ちよっと息苦しくなりました」と言ったが、一杯の水を飲むまでは回復しなかった。

このようにだらだら続いた十日のうち、六日間は単調そのものだった。判事席にはいつもの裁判官とその関係者、被告席にはいつもの容疑者、審議席にはいつもの弁護士。いつものように法廷の屋根まで達する質疑応答の声、いつものように裁判官のペンがこすれる

音、いつものように廷吏<sup>(21)</sup>が出入りする音。昼間に自然の日光が法廷に射していても、いつもの時刻にいつものガス灯がともされる。霧が出ると、大きな窓の外にいつもの霧のカーテンがたれこめる。雨が降ると、いつもの雨がパラパラ、ポタポタと落ちてくる。来る日も来る日も、看守や刑事被告人のいつもの足跡がいつものおがくずの上に見え、いつもの鍵でいつもの重々しい扉が開閉される音が聞こえる。そうした退屈な単調さのために、私は途方もなく長い期間にわたって陪審長をやっているような、ピカデリーがバビロン<sup>(22)</sup>と同じ時期に栄えた古代都市であるかのような、そのような気持ちになった。こうした単調さにもかかわらず、殺害された男が私の目の中で、その鮮明な輪郭を失うことは決してなかった。いかなる時も、彼の姿は誰よりもはっきりと見えていたのである。これは当然ながら省略してはならないことだが、私が殺害された男という名前で呼んでいる幽霊は、容疑者の方を見ることが決してなかった。少なくとも私にはそのように思えた。どうして見ないのだろうか、私は何度も何度もいぶかった。しかしながら、幽霊は決して容疑者の方を見なかったのである。

それだけではない。ミニチュアの肖像画が提出されてからというもの、裁判が結審する最後の瞬間まで、幽霊は私の方も見なかったのである。私たち陪審員は検討するために夜の十時七分前に退廷した。教区民代表の馬鹿と同じ教区の二人の太鼓もちが、またしても面倒を起こしたので、私たちは二度も法廷に戻って、裁判官の覚え書きから数ヶ所を取り

出して再読してもらわなければならなかった。その数ヶ所について、私たちの九人は少しも疑いを抱いていなかったし、同様に法廷の誰も疑っていないかった。にもかかわらず、大馬鹿の三人組は妨害することしか念頭になかったので、まさにその理由のために異議を唱えたのである。しかし、最後には私たちが勝ち、十二時十分前になって、ようやく全部の陪審員が法廷に戻った。

そのとき、殺害された男は法廷の反対側、すなわち、陪審席のすぐ向かい側に立っていた。私が着席すると、彼は非常に注意深い目を私の方に向けた。どうやら満足している様子で、腕にかけていた（それまで腕にはかけていなかった）大きな灰色のベールをゆつくりと手で振り、それで頭と首から下のすべてを包んだ。私が「有罪」という陪審の評決を下すと、そのベールは床に落ちた。そして、すべてが消え、あとはもぬけのからとなった。

裁判長は慣例に従い、死刑の判決が申し渡される前に何か言うことはあるかと容疑者に尋ねた。すると、容疑者は聞き取れない声で何かつぶやいた。翌日、主要な新聞が伝えたところによれば、それは「まとまりのない、支離滅裂な、聞き取りにくい言葉で、どうやら男は陪審長が自分に先入観を抱いていたので、公平な裁判は望めなかったと不満をもらっていた」ということであった。その男が実際に供述した驚くべき内容は、以下のようなものだった。

裁判長閣下、陪審長が席に着いた瞬間、俺はなんて運の悪い男だろうって思いました。閣下、やつが俺を無罪放免にするはずはねえだろうって、そう思ったんです。なぜかっていうと、俺がつかまる前に、どういうわけか知らねえが、やつが夜になってから枕もとに来て、俺をたたき起こし、首にロープを巻きつけやがったからですよ。

## 【訳注】

- (1) 海の深みに住むへびに似た怪物。この種の生き物については何世紀にもわたって船乗りたちの報告が数多くなされてきた。
- (2) ドイツの作家・批評家・書籍商のクリトフ・F・ニコライ(Christoph Friedrich Nicolai)のペン。劇作家・批評家のレッシングやユダヤ人哲学者・博愛主義者のメンデルスゾーンの文学仲間として啓蒙主義運動を組織し、ロマン主義の傾向を示すゲーテ、シラー、カント等を攻撃した。
- (3) 万華鏡の発明と偏光の研究で有名な物理学者(Sir David Brewster)。一八一五年に屈折率と偏光角との関係を示す「偏光角の法則」を発表。三五年にウォルター・スコットに宛てた『自然魔術に関

する手紙』を出版したが、その第三の手紙で当時の王立天文台長の（手紙の中ではA夫人として言及される）妻による幽霊の幻想体験 (spectral illusion) を数例あげている。

(4) 一八一一年から三五年まで第六代王立天文台長を務めたジョン・ポンド。この天文台は一六七五年にチャールズ二世によってグリニッジに創設された王立の施設で、現在は国立海洋博物館の一部。  
 (5) ディケンズの生涯の最後の十年（一八六〇年代）は殺人事件が頻繁に起き、一般大衆の殺人嗜好が強まった時代であった。

(6) シティーの西門にあった刑務所で、一七八三年に絞首刑場がタイバーンから移され、監獄前の広場に絞首刑台が建てられた。公開処刑の日には群衆が大挙して押し寄せたが、一八六八年に廃止。  
 一九〇二年に取り壊された跡地には現在の中央刑事裁判所が建っている。

(7) 当時、中産階級の読者を対象に編集され、殺人報道で抜きんできていた新聞は『デイリー・テレグラフ』。

(8) ピカデリーの大通りの中央から南東に延びた通りで、セント・ジェイムズ公園に行き当たる。

(9) ロンドンの繁華街の中心地であるピカデリー・サーカスからハイド・パーク・コーナーを結ぶ大通り。

(10) 王室所属の最古（一五三二年）の公園。

(11) 陪審は市民の中から選ばれた十二名の陪審員からなり、法廷で事実の審議にあたり、陪審長が裁判長に対して有罪か無罪かの評決 (verdict) を答申する。

- (12) 一五三九年にニューゲート監獄のそばに建設され、ロンドンで起こった犯罪や他の裁判所から移送される事件について審理する裁判所。伝統的に開廷期間中は裁判官が香しい花束を持ち込む習慣があるが、それは隣接するニューゲート監獄の悪臭を防いだ名残りである。
- (13) セント・ポール大聖堂の西側にある通り。通例は隣接する中央刑事裁判所の俗称として使用される。
- (14) フリート・ストリートとストランド街が接する地点にあった古い門。ディケンズの時代の楼門は、ロンドン大火後にクリストファー・レンが設計したもので、一七四六年までは謀反人や犯罪者の首がさらされていた。
- (15) タン皮とは皮なめし用の樹皮で、使い切った皮殻は藁などとともに石畳に敷かれ、馬車の車輪の消音に使われた。
- (16) ニューゲート監獄に投獄された悪名高い犯罪者たちの経歴を記録したもの（一七七四年に五巻本として出版）。一八二四〜二六年に刊行された新版は十九世紀前半に流行した一連のニューゲート・ノヴェルに材料を提供している。ディケンズの『オリヴァー・ツイスト』もその流れを汲んでおり、W・H・エインズワースの『ジャック・シェパード』（一八三九年）でピークを迎えた。
- (17) ビショップスゲート（現在のリヴァプール・ストリート駅を南北に貫いて走る大通り）の西側にあった大きな酒亭。三五五名を収容する食堂があった。裕福な商人たちが定例晩餐会を催していたが、ディケンズも劇場の経済援助のために何度か晩餐会を催している。

- (18) ロンドンの旧市内の中心部で約一マイル四方の地域。英国の商業・金融の中心地。
- (19) ディケンズは救貧院や養育院の役人の怠慢さが原因で收容者が熱病で死ぬ場面をいくつかの作品で描いている。この種の熱病は主として発疹チフス (typhus fever) で、絞首台よりもはるかに多くの囚人たちを死に至らしめた「監獄熱」はその異名である。
- (20) 原告または被告の評判、素行、徳性などについて証言する者
- (21) 裁判所で各種事務に従事したり、法廷内の秩序を維持する職員。
- (22) 古代メソポタミアの南部にあった王国バビロニアの首都で、逸楽と悪徳の大都会という比喻的な意味がある。

### 【作品と作者について】

本邦初訳。原題は「控え目に聞く話」(To Be Taken with a Grain of Salt)で、出典はディケンズが自ら編集長を務める週間雑誌『オール・ザ・イヤ・ラウンド』の一八六五年のクリスマス特集号。この号は『マリゴールド博士の処方箋』(Doctor Marigold's Prescriptions)と題され、掲載された八章の中で最初と最後の章(“To Be Taken Immediately”と“To Be Taken for Life”)および第六章「控え目に聞く話」がディケンズの書いたものである。本作品は『マグビー・ジャンクション』(Magby Junction, 1866)の第四章「信号手」(“No. 1 Branch Line”



『The Signal-Man』の姉妹篇として、のちに「二つの幽霊物語」(Two Ghost Stories)とごうたイトルで『クリスマス・ストーリーズ』に収められた。ここでは「控え目に聞く話」が「殺人裁判」(The Trial for Murder)というタイトルに変更されている。しかし、その後の『クリスマス・ストーリーズ』では、『マリゴールド博士の処方箋』の三篇(「控え目に聞く話」は第二章)が「マリゴールド博士」としてまとめられている。

ディケンズは、幼年時代に父親が借金不払で投獄されたために、靴墨工場で悲惨な労働を経験させられ、そのトラウマが彼の一生に深刻な影響を与えた。やがて彼は速記術を習得して新聞社の議会通信員となり、同時にロンドンの風物を題材に小品を書き始め、それを集めた『ボズのスケッチ集』で好評を博した。『ピクウィック・クラブ』で一躍して有名作家となったディケンズは、『オリヴァー・トウエスト』や『クリスマス・キャロル』といった前期の作品群で個々の社会悪を摘発し、人道主義的な社会改革を唱えたが、その社会批判は『荒涼館』、『リトル・ドリット』、『大なる遺産』、『互いの友』といった後期の作品群では社会システムに向けられるようになる。ここでは象徴的な技法が採り入れられ、前期の楽観的な雰囲気にならわって悲観的な色彩が濃くなる。時代精神と社会風潮を巧みに描いたディケンズの

精細な観察眼と豊かな想像力は、戯画的とも言える個性に富んだ活力のある数多くの人物を創造した。家庭生活では妻キャサリンと性格が合わずに別居し、素人演劇で知り合った年下のエレン・ターナンと秘密の生活を送ったが、晩年は公開朗読に熱中するようになり、その疲労のために体を壊してしまい、推理小説『エドウィン・ドルードの謎』を未完成のまま、一八七〇年に五十八歳で死去した。